
緋弾のアリア～イ・ウーのだらだら少女～

Canan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリアーイ・ウーのだらだら少女

【Nコード】

N7167X

【作者名】

C a n a n

【あらすじ】

この物語は、成り行きでイ・ウーの立ち上げに協力し、初期から所属している、目的もない、暇人のだらだら少女のぐだぐだなお話です。

基本的には原作に沿うつもりです。ぐだぐた、だらだらが嫌いな方は回れ右です。

ご感想やご意見をお待ちしております。

第1話（前書き）

緋弾のアリアを読んでみて、二次創作を書きたくなったので、書いてみました。

第1話をどうぞ！

第1話

「ねえ、教授。ワインないんですか？」

「君は外見が未成年だろう。見た目が二十歳になってからにしない」

「ええーいいじゃないですか、外見が未成年でも。実際生きている年数は教授より長いんですし、別に差し支えありませんよ」

「駄目だ、お茶で我慢しなさい」

私は今、とある潜水艦の中で、教授と久々のディナータイムです。申し遅れました。私は姫咲桜ひめさくらと言います。私はイ・ウーの初期メンバーであり、また武偵高校の強襲科の生徒でもあります。

初期メンバーと言うことは年齢が軽く100歳は越えています。まあそこは紆余曲折ありまして、普段は武偵高校の生徒をしています。が、ちよくちよく厄介事が入ると、イ・ウーのメンバーとして暗躍しています。

厄介事は殆ど理子に押し付けているので、余程の事でない限りは動きませんが。

「で、君はどうするんだ？私の寿命はそう長くはないのだよ？いい加減にイ・ウーを引き継ぐつもりになったかね？」

「嫌です！何回言ったら分かるんですか？あんな個性的過ぎるメンバーを纏めるなんて、考えただけでもゾツとします」

そう。これはただのディナーではなく、教授が私にイ・ウーを引き継がせる為に説得する、謂わば交渉の場。

「でも、それを私はやって来たんだよ？君もやれば出来るさ」

「やるにしても、私がイ・ウーを引き継ぐことにパトラは賛成しないと思いますよ？」

私の質問に教授は即答した。

「さあ、それは分からないね。やってみないと」

「いや、分からないと言われても困ります……………まあ、私は成り行きで、組織立ち上げに協力したただけなんですから、そんな大役を押し付けしないで下さいよ」

「と言うことは……………私が居なくなった後、組織が崩壊することになるがいいのかい？」

教授は顔を曇らせて聞いて来る。私は松阪牛のステーキを一口食べた後に答えた。

「はい、もし組織が崩壊したとしても、別に私は構いませんし、独りでやって行けますから……………で、崩壊後はこの潜水艦を私が貰いますけどね」

私がそう言つと、教授は笑いだした。

「潜水艦だけとは、これはまた面白いことを言う」

「私的にはラジコン形式にして、好きな時に呼び出しの出来る、基地にしようと思ってますけど、別に構いませんよね？」

「ああ、構わないさ。私が居なくなっただ後には好き勝手に使ってくれ」

「分かりました……明日は学校なので、そろそろ寮の方に帰らせて貰います。このお話はまた今度で」

私は席を立ち、教授にお辞儀をして、部屋から去ろうと扉を開いた。すると、教授が言った。

「桜よ、毎回私は思うが、君は美味しい食事を食べる為に話を引き延ばしてないかね？」

ギクツ！

「そ、そんなことないですヨ？」

「語尾が棒読みになっているね、どうやら凶星の様だ」

「し、失礼しました！」

私は、赤くなっている顔がバレないように、かなり深い会釈をして扉を勢い良く閉めた。

いつから教授は分かってたんでしょうか？これで7回目のディナーですから、3回目くらいでバレてましたかね？

どうなんでしょう？次のディナーで聞いてみましょうか。

「1時間後」

「ふう、疲れますね」

私はあれから、偽装した巡視艇を操縦し、武偵高校まで戻って来た。今は女子寮に向かって、暗い夜道を歩いているところです。

私の部屋は2階の一番手前の部屋です。階段を登り、部屋のドアを開けようとした時、ドアが勝手に開きました。

「勝手に人の部屋に押し入っていいなんて、言いましたか？」

私が暗い部屋に向かって、そう言うと、フリルの沢山付いた改造制服姿の同業者が出て来た。

「なんだ4世ですか、最悪なお出迎えですね」

「だから、あたしのことを数字で呼ぶなと言ってんだろ！」

理子はそう言い、素早い動きで私の首にワルサーP99を突き付ける。

「いい加減にしろよ！どいつもこいつもあたしのことを『4世』と

呼びやがって、ふざけんな！」

理子は威勢の良い声で叫んでいた。

「なんですか？『ふざけんな』はあなたの方ですよ、底辺の癖に調子に乗るのも程々にしないと、心臓に鉛をぶちこみますよ？」

「ふん！イ・ウーの中でもお前は強いと言われているが、果たしてどうなんだろうな？ハツタリじゃねえのか？いい加減、厄介事をあたしに押し付けずに自分でやってみたらどうだ？この能無し！」

理子は数字で呼ばれることに沸点が低いですね〜

やっぱり数字で呼ばれるのは嫌いみたいです。まあ理子もこんな夜中にサイレンサーなしで撃つとは思えません。警告のつもりなのでしょう。

今日は相手をするつもりはありませんし、寝たいし、帰って貰いますか。

「どこでもいいから、早く帰ってくれませんか？明日から学校なので寝たいんですよ」

「はあ？お前から吹っ掛けておいてなんだよ！まあいい、覚えてろよ？いつかお前をぶち殺してやる！」

理子はそう言い、自分の部屋へと去って行きました。

しかし元を正せば、人の部屋に勝手に押し入っていた理子が一番悪いと思いますよ？

それから私はお風呂に入り、ゆつくりとバスタイムを楽しんだ後にはすぐ布団に入る。

ふう〜もふもふです〜

じゃあ寝ますか、お休みなさい。私は眠りについた。

〜次の朝〜

「ふわぁ〜起きますか」

私の朝はかなり早い。5時起きです。布団から出て、背伸びをするまずは朝ごはんつと。

棚から買い置きしているクロワッサンを取りだし、インスタントコーヒーを作る。

ちやぶ台にコーヒーを乗せて、パンを頬張った。

「もう、こんな時間ですか」

時計を見ると、始業時間まで後、10分。私は食器を片付けて、制服に着替えて、ホルスターにいった相棒（デザートイーグル・50AE版）とを装備して、学校に赴く。

5分くらいだらだら歩くと、学校に着く。二年A組の教室に入ると、理子がこつちを睨んで来た。

まだ昨日のことを引き摺ってるみたいですね。元を正せば、理子が悪いのに。

「おお！桜ちゃんおはよう！」

「おはようございます」

この人は武藤剛氣、車輛科^{ロジ}の優秀さんですね。
乗り物ならなんでも運転出来るそうですが、どうなのでしょう？
任務が一緒になったら分かりますね。

「桜、おは…よう」

「おはようございます」

死にかけて声で私に挨拶をしてくるのは、遠山キンジ。普段は弱い
が、ヒステリアモードの時は警戒すべき人物です。
周りの噂によれば、最近、教授の子孫とべたべたしていると聞きました。
た。いつの間にそつちの世界に踏み行ったのでしょうか？

私は挨拶を返して、自分の席についた。

「で、キンジの隣の席は誰なんですか？なんか剛氣が別の場所に移動している気がしますか？」

「ああ、それはすぐに分かるさ」

キンジがそう言うのと、私よりちっちゃく、ツインテールの少女が教室に入って来ました。

なるほど、確かに、教授の言っていた通りの容姿です。こいつが教授の子孫で緋弾の継承者（予定）ですか。

「キンジ！あんた私を置いて行つたわね！風穴よ！」

「大体、アリアがこんな時間にももまん買いに行こうなんて言うのが駄目なんだろう、だから俺は先に登校したんだろ」

ふうん、どうやら私が欠席していた内に色々あったみたいですね。

「で、キンジ！あたしの席の前にいるこいつ誰なの？昨日は居なかったけど？」

む、態度が悪いですね。教授はとても物静かで良い方なのに……子孫は態度がゴミみたいですよ教授。

「こいつ？あなたは態度が最悪ですよ？誰と比べているのかは言いませんがゴミレベルですね。初対面の人に対して、こいつ扱いとは……礼儀の知らないお子さまのやることですよ」

私は緋弾の継承者にどれ程の力があるのか、試す為にわざと挑発してみる。すると案の定、乗って来た。

「お子さま？……あたしはお子さまじゃない！ふざけんな！」

ダァン！

お子さまはホルスターから銃を抜き、私の顔すれすれに撃ってきた

「次、あたしにそんなこと言ったら風穴よ！」

へえ、射撃の腕はかなりの物ですね。ですがまだまだです。緋弾の継承者にしては、少し幼過ぎるのでは？

私はこの東京武偵高校に入って、2年目です。ちなみに知り合いは4人しか居ません。遠山キンジと武藤剛気と星枷白雪と理子です。3人とは1年の時に、理子とは勿論、イ・ウーで知り合いました。この高校は普通の高校がやるような一般の教科が5時間目まであり、そこなら専門に分かれるようになっていきます。

私は強襲科なので、科の授業になると知り合いは居らず、毎回一人になります。授業と言っても、専ら射撃訓練や模擬戦などで、とてもハードなものです。

能力がバレない様に、射撃訓練の時は的を外したり、模擬戦の時はわざと負けたりして、なんとかバレずに今までやって来ました。

放課後になると、基本的には寮に帰って昼寝、若しくはゲーセンで時間潰しくらいしかしません。

私は学校が終わると、足早に教室から退散して寮に帰ります。

私が今日はどうしようかと、考えていると、寮の建物の2階の廊下から白雪が降りてきました。

「久しぶりね、白雪」

私の挨拶に白雪が反応し、ニコツと笑みを浮かべた。

「久しぶり、桜ちゃん。昨日はなんで休んだの？」

「まあ色々あつてね」

イ・ウーの次期リーダーについての話を潜水艦でしていたなんて、絶対に言えない……。まあ言っても白雪はイ・ウーをまだ知らないと思うから大丈夫だろうけど。

でも、いずれ教授の目的により、緋弾の継承者はイ・ウーの存在を知ることになるとは思う。勿論私の正体もバレてしまうでしょう。その時は武偵^{ぶてい}高校から離れることになる。

だから悔いの残らない様に高校生活を楽しまないと。

「で、白雪は何処に行くの？って聞かなくても分かるわよ。キンジの所でしょ？」

「うん！キンちゃんの為に沢山ご飯作ったから、届けに行くの」

白雪は幸せそうに顔を緩めている。本当にキンジのことが大好きなんです。その一途さには感服します。

ん？ちょっとストップ。

普通、白雪ならキンジに女の子が引っ付けば、すぐに黒雪になる。私がよくキンジと遊んでいた頃によく黒雪化した↓緋弾の継承者が引っ付いているのに黒雪になっていない↓つまり、白雪は緋弾の継承者のことを知らない↓付いて行くと面白いことが起きる！

よし！決めた。今日の放課後はキンジ最大の難を外野で観察しますか。

「白雪、私も付いて行っても構いませんか？」

「はい、一緒に行きましょう」

白雪はとてもニコニコした顔で頷き、そう言った。

やっぱり、白雪はキンジに緋弾の継承者が引っ付いていることを知らないのでしょうか。

さあ白雪がどんな反応をするのか楽しみです。

私と白雪はお喋りしながら、キンジの部屋に向かって、歩き始めた

第1話（後書き）

第1話、どうだったでしょうか？

かなりぐだぐたで書いているので文体が無茶苦茶で、誤字・脱字だらけだったと思いますが、後書きまで読んでくれている読者の方々、ありがとうございます。

これからそこそこの更新速度で行こうと思っていますので、よろしくお願いいたします。

第2話（前書き）

『前回のあらすじ』

桜は教授と、イ・ウーの次期リーダーについて7回目のディナーを行い、次の日に、アリアとの初邂逅。

その後、白雪と一緒にキングジの部屋に向かいました。

第2話

白雪と私は数分歩き、キンジの寮の部屋の前に着いた。

ピン、ポーン

白雪がボタンを押すと、乾いたチャイムの音が鳴る。
数十秒経つと、中からキンジが出てきた。

「だ、誰だ？って白雪と桜か」

「あつ、キンちゃん……あのこれ、お夕飯作って来たから、キンちゃんに食べてもらおうと、思っ
て持って来たの」

白雪はそう言い、包みをキンジに渡していた。

「はろーキンジ、なんか焦ってるみたいだけど、何か隠してないですか？」

私がそう聞くと、更に焦りだした

「な、何もないぞ？」

「ふーん、なんか怪しいわねーその喋り方と言
い、おろおろしているキンジを追い詰めて行く。ああー楽しい」
尋問が得意なこと
で有名な綴とか言う教員はこの楽しさを毎回味わ

っているのね。私も尋問の技術を勉強しようかな？

「いや、本当になんでもない」

「き、キンちゃん！様子がおかしいけど、大丈夫？熱出してない？」

普段と喋り方や動作などの様子がおかしいキンジに白雪は心配している様ですね。

まあなんせ、白雪は昨日、超能力捜査研究科、通称SSRのことで手が離せなかったらしく、キンジの所に行けなかったと、来る途中に嘆いてましたからね」

一途な白雪からしたら余程心配なのでしょう。

私は散々弄って満足したので帰ることにします。流石に緋弾の継承者が部屋の中にいることがバレるとキンジが可哀想なので、白雪も一緒に連れて帰りますか。

バレて黒雪化するのは次にお預けです。

まあ可哀想と言うのは、表向きの理由で本当はこの楽しさを何回も味わいたいですけどね。

「白雪、キンジは大丈夫です。ほら日も暮れて来ましたし、夕飯を渡して早めに帰りましょう」

「で、でも……」

「白雪、キンジは疲れてるみたいだから、早めに寝かせてあげない

と駄目でしょ？本格的に熱でも出したらどうするの？私たちがいることでキンジも気を使うと思いますよ？」

「そ、そうですね、キンちゃん！ゆっくり休んで元気になってね」

「ああ、分かった。白雪、桜、ありがとな」

キンジはそう言って、ドアを閉めた。

私たちは女子寮に向かって、歩き始める。

ふう〜キンジも色々と苦労してますね。緋弾の継承者には目をつけられますし、世話焼きの巫女さんは積極的ですし、ゆっくり休める間がないので、疲れも溜まるのは確かでしょう。

「ねえ、白雪。もしキンジが世界を又に掛けて暗躍するような組織と戦うことになったら、どうしますか？」

「もしそうだったら、私は必ずキンちゃんの力になるよ。キンちゃんの為なら、星枷のきまりを破ってでも力になる。でも桜ちゃん、どうしてそんなことを？」

「私は白雪の心意気を聞きたかっただけよ」

その後、寮に着くまでの間、白雪にノロケ話を永遠と聞かされた。今更ですが、こんなこと聞かなければ良かった……

「じゃあ桜ちゃん、また明日」

「じゃあね、白雪」

寮に着いた私は白雪と別れ、部屋に戻る。部屋の時計を見ると、もう6時だった。

はあゝ暇になりましたね、何しようかな？

私はジャージに着替え、カーペットを敷いてあるちゃぶ台の近くに寝転び、古い雑誌を読む。

ゝ4時間後ゝ

ああゝ暇、ひまひまひまあ！

雑誌を読んだり、ネットをしたりしていましたが、それでも暇過ぎで仕方がないので私はコンビニに出向くことにしました。暗い夜道を独りでトボトボ歩き、コンビニに向かいます。

「桜、久しぶりね」

「はあゝ用があるなら早めに来てくれませんか？コンビニに行く途中なんですけど」

私がそう言つと、路地の曲がり角から、絶世の美女が出てきた。と言つても女装しているだけですけどね。

「なんだカナですか。用があるなら早めに済ませて下さいね。私もあなたと駄弁っている程、暇ではないので」

「じゃあ単刀直入に言つね、今、教授は何処に居るの？潜水艦の場所が掴めないのだけど」

カナは心底困つた様な顔をして私に尋ねてくる。

「潜水艦が何処に居るのか、私にもよく分かりませんよ。最近、潜水艦には行つてませんし」

私は嘘をついた。教授は恐らく、カナ、いや遠山金一がイ・ウーを内部から崩壊させようとしていることを知っているのでしょう。だからカナには場所が分からない様にしていると、私は思いますね。

それに今、潜水艦の場所を知っているのは多分、私ぐらいです。

私は他人と関わることが少なく、メリットがない限り、易々と情報を流すことはありません。その私の性格も考えて教授は動いてはいるはずですからね。

後、カナに嘘をつきましたが、今まで監視されているような感じはしなかったので、大丈夫でしょう

カナは私の言葉に、納得する様な様子を見せると、

「そうですか、では自力で探してみます」

そう言つてカナは暗闇の中に消えて行つた。

まあ、カナの様子は納得した感じでしたが、本心は納得してはおらず、渋々引き下がった様ですね。

今、私と戦つたとしても、時間を無駄に使っただけだから、カナは効率的な方を選んだに過ぎません。

ふう〜やつとコンビニに、行けます。しかしカナが来るとは予想外でしたね〜

それに崩壊させる様に働きかけなくても、教授が居なくなれば、自然崩壊するはずですからね、カナは完全に無駄足です。

コンビニに着くと、私は雑誌を読み始める。すると……

「お嬢様ちゃん、もう10時だよ？お家に連れて行ってあげるから帰りましょう？」

婦人警察官の方でしょうか？私にそう話し掛けて来ました。

全く！失礼ですね！確かに背が低いので、そう見られるかもしれませんが、私は高校生ですよ？中学生や小学生ではありません！

「私は武偵高校の生徒です！決して中学生や小学生ではありません」

私がそう言っても、警察官や店員さんや買い物に来ていたおばさんまでもが、優しい目で見てる。

一体、なんですか！そんな優しい目で！喚いてる子供を温かく見守ってるみたいじゃないですか！

「ねえお嬢ちゃん、もし武偵なら武偵高校の学生証ない？」

そうです！その手がありました。武偵高校の学生証を見せれば、分かってくれます。

「ちょっと待って下さいね」

うーんと……………

あっ！……………そ、そう言えばジャージに着替えたから……………学生証は今頃、壁に掛けてある制服のポケットの中に。
ああゝやってしまいました。

こうなってしまうば逃げるしか……………先手必勝！
私はダッシュでコンビニから逃げたしました。

「ちょっとお嬢ちゃん！待ちなさい！って速っ！走るの速っ！」

警察官の方はこんなことを言っていました、私が素直に捕まる訳がありません。

こうして全速力で走り、武偵高校の校門まで辿り着きました。

武偵は夜の任務もある為、常に校門は開いています、24時間体制で監視されており、敵が入るとすぐに分かる仕組みになっています。

そこを通り、やっと女子寮の私の部屋に戻って来ました。

ふう〜久々にいい汗をかきました。お風呂に入るとしましょう。

私がお風呂に入り、10分くらい経った時に、チャイムが鳴った。

ピンポン！

こんな時間に誰でしょうか？私は素早く服を着て、相棒（デザートイーグル・50AE）を持ち玄関の覗き穴から、外の様子を窺う。

成る程、またもやイ・ウー絡みですか。

私が扉を開けるとそこには……………

第2話（後書き）

『次回予告』

今回は、桜の部屋にとある人物が訪れてます。イ・ウー絡みです。もう分かったと言う方もいるでしょう。

理子の行方『武偵殺し』の方も激化して行きます。

その時、だらだら桜はどう言った対応を取るのか？

楽しみに！

（次話の内容は文章量により、予定を変更するかもしれません。予めご了承ください）

オリ主の概要（前書き）

どうも、こんばんは

今回は桜のプロフィールになります。予定を変更してしまい、申し訳ありません。

オリ主の概要

（主人公）

名前……姫崎桜ひめざき 桜

年齢……1000歳以上。（月の民であり、平安時代にかぐや姫を迎えに来た従者で月には戻らず、日本に逃げて暮らしている）

身長……150cmくらい、体重は極秘。知ると一瞬で葬られる。

スリーサイズ……そんなに執拗に聞くと、どうなるかお分かりですよね？

学年とランク……学年は2年A組でランクはA

携帯武器……デザートイーグル（.50AE）、スぺツナズナイフ。

基本的にはデザートイーグルを片手で使う。スぺツナズナイフは緊急時のみ。武器の手入れは自分で行っている。

超能力……unknown

特徴……茶髪のロング、瞳は黒。部屋では専ら、ジャージを着ている。

備考……極度のアイス好き。特に好きなのがスーパーカ？プの抹茶

味。週に20個くらい食べるが、全く太らない……摩可不思議。
冷凍庫の中にはストックとして5つは入れてあるらしい……

本来の年齢は1000歳を越えているが、見た目は未成年なので、
教授はワインを飲ませてくれない。しかし非合法でワインを手に入
れ、飲んでいる。

イ・ウー立ち上げに成り行きで協力し、なんとなく所属している。
教授とはイ・ウーを立ち上げる前からの仲で、よく二人でご飯を食
べる程である。

あまり戦うことに興味がなく、任務もやる気がなく、だらだら過ご
すのが専ら。しかしやる気を出すとチート。

昔、通りすがりにぶつかって来た男に、食べていたアイスを落とさ
れたという理由だけで瞬殺したくらいである。

桜は、殺した男が世界に8人しか居ない、Rランクの武偵だったこ
とに後に気付き、驚いたらしい。なので現在、Rランクの武偵は7
人に減っている。

うーん、食べ物の恨みは大きい。

ちなみにイ・ウーの中で仲が良いのは、教授とジャンヌだけ。

理子は、桜がRランクの武偵を瞬殺したことを知らない為、実力に
ついて疑っている。

日常生活……普段はだらしており、授業を受けては居るが、真
面目ではなく、居眠りをし、教師の中では才能の無駄遣いと呼ばれ
ている（だらだらしているのに、ランクがAである為）

寮では昼寝かネットで勉強など全くしない。机に埃が被っている程

である。

ゲーセンが好きで、UFOキャッチャーの腕はプロ並み、取ってき
たぬいぐるみやキーホルダーを部屋に飾っているなど、乙女な一面
もある。

また面白い事が好きで、アリアのことが、白雪にバレそうになるキ
ンジの様子を見て楽しんでいる。

武偵高校に知り合いは4人しかおらず、キンジと剛気と白雪と理子
だけで交友関係は少ない。

オリ主の概要（後書き）

桜のプロフィールはこんな感じです。ご意見やご感想をお待ちします。

ここで、原作をあまりお知りでない方の為にRランクについて、説明した方が良くはないのか、と言うご意見がございましたので、補足をさせていただきます。

Rランクとは Royal つまり、武偵としては最強のランクです。アリアのSランクよりも高く、原作では世界に7人しか居ないとされています。

この小説では、Rランクの武偵が元は8人居り、その一人を桜がとんでもない理由で殺した設定になっています。

次回こそは第3話になると思います。お楽しみに！

第3話（前書き）

『前回のあらすじ』

桜のプロフィールでしたので、あらすじはありません。

第3話

扉を開けるとそこには……………

ジャージ姿のジャンヌ・ダルク30世がいた。
結構、似合ってますね、部活帰りの女子高生って感じです。

「久しいな桜、元気だったか？」

「ジャンヌ！久々ですね」

ジャンヌは、大きなスーパーの袋を持っていた。

「ほら、お土産だ」

ジャンヌはそのスーパー袋を私に差し出した。それを受け取りジャンヌを中に入れる。

「どうぞ、部屋に入って」

「お邪魔する」

部屋の隅に立ててあるちゃぶ台を真ん中にセットして、向かい合わせに座わり、私はジャンヌに話し掛けた。

「で、今日はどうしたんですか？私が出ないといけないような問題でも発生しました？」

私がそう聞くと、ジャンヌは首を横に振って答えた。

「いや、桜と久々に長話がしたくてな、土産を持って立ち寄ったと言っ訳だ」

そうですか。最近お互いに忙しくて話もあまりしてませんからね。長話をするのでしょうか。

「良いですね。今日は久々にだらだら飲んで食べて、朝まで駄弁りますか？」

「ああ、そうするでしょう」

私の提案にジャンヌは頷き、深夜の女子会（二人だけ）が始まった。

大抵、ジャンヌが私の部屋に訪ねて来る時は、問題が発生した時か、親友として長話をする時くらいです。

それも理子やカナが活発に活動している、この状況から考察するに前者の可能性が高い、そう私は思ったのですが、見当違いだったみたいです。

私には一つ疑問に思う所があったので、ジャンヌに聞いて見ることにしました。

「ねえジャンヌ、なんでジャージなんですか？」

私がそう聞くと、ジャンヌはおろおろしている。いつもの態度とギャップがあつて、凄く可愛いです。世間で言うギャップ萌えとはこういうモノなのですかね？

「そ、それは……い、いつも会う時に桜はジャージが快適だと言っていただろ？だ、だからどうなのか試してみたのだ」

「そうだったんですか。確かに以前、そんなことを言った覚えがありますが、ジャンヌが他人に感化されるとは珍しいですね」

「それが着てみたら意外と快適でな、甲冑よりも良かったのだ。但し一つ問題があつて」

「なんですか？」

すると、ジャンヌは困った表情を浮かべて言った。

「ショッピングセンターを一人で歩いていると大勢の視線を感じてな。見られていることが恥ずかしくなつて、商品を買ひ、猛スピードで退散したと言う訳だ。あれは誤算だったな、まさか私があんなに注目を浴びるとは……」

「ふふふww」

「なっ！桜！何を笑っている！」

それは恐らく、ジャンヌがあまりにも綺麗だからだと思いますけどね、日本に銀髪の美人さんなんて居ませんし。

けど、これを直接言ったらジャンヌが照れて、頭から湯気を出し、無言になりますから、辞めておきましょう。弄るのも適度にしないとジャンヌが可哀想です。

あっ！そう言えば、コンビニに行ったついでに夕飯を買おうと、思

っていましたが、警察官に追われていた性で忘れてきました。どうしましょう？

材料なら色々、冷蔵庫の中にあります。こんな夜中に調理するのは面倒です。

「ジャンヌ、夕飯って済ませましたか？」

「ああ、済ませて来たが？桜はまだ済ませてないのか？」

「ええ、まだですよ。警察官に追いかけてましたからね」

何事も無かったかの様に私が言うと、ジャンヌは驚いていた。

「け、警察？イ・ウーのメンバーだとバレたのか？」

「いいえ、コンビニで雑誌読んでたら、補導されそうになったので逃げてきただけです」

「そうか、なら良かったな」

「ですね。バレたらここに居ることが出来なくなりますからね」

私がイ・ウーだってバレたら、ここに居ることが出来なくなりますし、公安0課に追われることにもなる。それだけは避けたいですね

しかし、その内にキンジと緋弾の継承者はイ・ウーの内部について知ることになるはず。その時、イ・ウーに私が所属していることが発覚しないようにしなければなりません。

一番手っ取り早い方法は、今、ここらにいるイ・ウーの仲間、つまり、理子、カナ、ジャンヌ辺りを一掃して口封じすれば良いのです

が、大親友であるジャンヌを殺すことは出来ません。

元々、ジャンヌの母親は私と決闘し、そこで負った傷が原因で亡くなったそうです。

そしてジャンヌは親の敵である私を殺しに来ました。そこからイ・ウーに引き込んだのは私です。

勿論、引き込んだからには最後まで面倒を見てあげるつもりですよ

さてと、難しいことを考えていても疲れるだけですから、夕飯としてアイスでも食べますか。

「ジャンヌ、私は夕飯としてアイスを食べますが、ジャンヌはどうします？アイス食べますか？」

「私はいい、遠慮しておく」

ジャンヌは要らないらしいので、私は席を立ち、冷蔵庫のある台所へと向かう。

冷蔵庫の一番上の扉を開き、中にあるスーパーカ？プの抹茶味を3つ取り出し、スプーンを持って、リビングに戻ると、ジャンヌが口を大きく開けて、ぽかんとしていた。

「さ、桜、お前は3つもアイスを食べるのか？」

「はい、そうですけど？」

「お腹、壊さないのか？」

「大丈夫ですよ、いつもこんな風ですから問題ありません」

私はベッドに座り、1つ目の蓋を取ってゴミ箱に捨て、食べ始めた。

「桜、ほんの少しだけ重要な話があるから、聞いてくれ」

ジャンヌは姿勢を正座に直して、私の方に向く。

「なんでしょうか？ やっぱり最近の緊迫した状況についての話ですかね？」

「何ですか？」

「ここ最近、カナは教授の子孫、つまり神崎・H・アリアについて探っている。それが何の為に分かるか？」

へえ、そうですね、となるとカナはイ・ウーを崩壊させる為に、教授が緋弾の継承者として見込んでいる神崎・H・アリアを殺して、イ・ウーの未来を根絶やしにするつもりですね。その内に私を殺しにも来るでしょう。」

教授は私に次期リーダーを任す気で居るみたいですが、やる気はありませんしね。イ・ウーがどうなろうと構いません。ですが殺されるのは嫌ですね。」

どうせ殺しに来るとしても、カナ一人だけではなく、私のことを快く思っていない、パトラや理子が仲良くセットで来るかもしれませんね。

まあ、私を殺しに来た人達をみんなセメントで固めて、東京湾に沈めてあげましょう。」

「どうせイ・ウーを崩壊させる為に、神崎・H・アリアを殺すのだと思いますよ。緋弾の継承者ですから」

私がそう言い放つと、ジャンヌは驚いては居らず、薄々とは気付いていたみたいでした。

「やはり、桜もそう考えるのか……で、どう動くつもりなんだ？」

「私はだらだら過ごしますよ？万が一、緋弾の継承者に危機が訪れれば、手助けしますけどね……教授（親友）は緋弾を継承する為に延命して150年も生きて来たんですから、その目的を是非とも達成して欲しいんですよ」

「そうか……なら私も桜側につくでしょう。桜と敵対して戦うことなんて、もう二度としたくないからな」

ジャンヌは苦い顔をして、そう言った。

「で、重要な話はそれだけですか？」

「ああ、そうだ」

「なら今からは明るい話でもしましょうか」

私とジャンヌはそれから、服やアクセサリーの話で盛り上がり、気付けば夜中の3時になっていた。

「もう3時か。そろそろ私は帰るとしよう」

「そうですね。警備が手薄な夜中の間に出了方がいいですよ」

私はジャンヌを見送りに玄関まで出る。

「じゃあ、また話がある時に伺うとしよう。今日は久々に長話が出来て楽しかった。ありがとな」

「いえいえ、用が無くてもいつでも来て下さいね」

「またな」

ジャンヌは私に手を振り、闇夜の中に消えて行った。私もドアを閉め、鍵をかけ、布団に潜り込む。

じゃあそろそろ寝ますか。なんか明日寝坊しそうな気がします、まあいいでしょう。

それではおやすみなさい……………

～次の朝～

はい、どうも桜です。

完全に遅刻です。朝起きて時計を見ると10時を過ぎていました。

こんな風になってしまった原因は絶対に深夜3時までジャンヌと喋っていたせいですね。

単位はある程度、取っているので大丈夫だと思います。今日はゆっくり寮でゴロゴロするとうしましょう。

ブルブル♪ブルブル♪

おや？珍しく携帯が鳴ってます。滅多に携帯なんか使わないので解約しようと思っていたんですが、教授が『緊急時の連絡に必要なから持ってなさい』って言われたので持っては居ます。けど普段、持ち歩いていないので携帯の役目を果たしてません。

「はい？教授ですか？」

「ああ、私だ」

教授ですか、こんな真っ昼間からなんの用でしょう？

「なんですか？何か起こりましたか？」

「桜よ、この時間にそうやって電話が出来ると言つことは、授業をサボっているのかね？」

「いいえ、違います。昨日の晩にジャンヌが来て、お話をしてましたから寝るのが遅くなってしまい、寝坊したんですよ。で、学校に行くのも面倒なので、ゴロゴロしていると云う訳です」

「それは客観的に見ればサボっているとは思えないがね」

失礼ですね！サボってなんかいません。寝坊しただけです。

「で、ご用件は？」

「桜よ、今からこちらに戻るかい？パトラ、カナ、リュパン4世についての重要な話があるのだよ。このままだと桜がみんな殺しちゃうだからね。それでは不都合が起きてしまう。なので今回、私のビジョンを全て語るとしよう」

私がパトラ達を殺せば不都合が生じるって何故でしょうか？別にパトラは厄介者ですし、カナもイ・ウーを崩そうとしている張本人。理子は毎回毎回、鬱陶しいのでその内に殺ろうとは考えてましたがどうなんでしょう？

まあそのことは今から、潜水艦に赴いて教授に直接聞けばいい話です。すね。

「分かりました。すぐに行きますよ」

「そうしてくれ、じゃあ潜水艦で待っている」

教授がそう言っていると電話が切れた。

さてと、見つからないように行きますか。

真っ昼間から巡視艇を運転するのも疲れますが、仕方ありません。

私は私服に着替えて、携帯をポケットに入れ、部屋を出る。
そこから、巡視艇を隠してある場所に向かい、操縦室に入り、エンジンをかけて、出港した。

第3話（後書き）

『次回予告』

次回、桜は潜水艦に向かい、教授は自分自身が企む計画について全
てのことを、話します。
それを聞いた桜が取る行動は如何に？

『お詫び』

えゝ2週間程、間が空いてしまつてすみませんでした。
作者がファイナルファンタジー零式をやっていたので、投稿出来ま
せんでした。

10月27日以降、ユーザーページにもアクセスせず、発売日と次
の日は寝ずに徹夜でプレイしていました。

お陰様でレムがLV70まで育てられたので、そろそろ執筆を再開
しようかと思っています。

待っていた読者の皆さんすみませんでした。これから頑張つて行き
ますので応援よろしく願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7167x/>

緋弾のアリア～イ・ウーのだらだら少女～

2011年11月12日05時57分発行